



誰もがやがて直面する死。あなたは親類・縁者に見送られたいですか。それとも、血縁や地縁に頼らない道を探りますか。一人暮らしが増えている今、人と人の結びつきについて、死の周辺から考えてみたい。(古岡三枝子、山畑洋二)

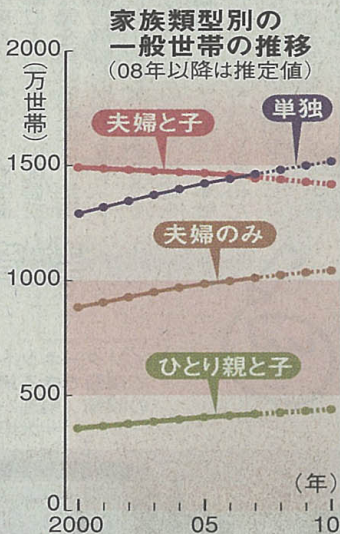


小さな骨入れ。引き取り手がないこともある(大阪市内で) 泉祥平撮影

つながり失い 増える孤独死

桜が散り始めていた。70歳の女性が昨年春、大阪市営の斎場で火葬された。炬から出されたお骨は、生前見守ってきた後見人に拾われ、白いつぼに納められた。葬儀会社の社員2人が立ち会った。

亡くなった女性は一人暮らし。ふらりと出掛けることがあった。2日前一人で外出し、夜事故に遭った。葬儀をどうするのか、決めねばならない。後見人が、中部地方に住む兄に連絡したが、「自分も高齢で、大阪には行けない」。



一人暮らし(単独世帯)は2007年、1462万世帯と、「夫婦と子」世帯を抜き、家族類型のなかで最も多い形態になった。

中でも、高齢者の一人暮らしが増え、厚生労働省の国民生活基礎調査などによると、65歳以上の一人暮らしは約410万2000人。それらの人々をめぐる様々な結びつきが、あちこちで途切れ始めている。

「愛知県刈谷市)もその一つだ。3年ほど前、中部地方の老人施設で亡くなった80歳前後の高齢女性の個室を、スタッフ3人が片づけた。数少ない持ち物の中に古い木箱があった。色あせた紙のロボットが入っていた。足の部分についていた名札に、息子の名前が幼い字で書かれていた。息子のノートもあった。

亡きがらを棺おけに納めた葬儀会社の社員が再度、電話すると「葬儀はしません。焼いてもらったら、それで結構です。遺骨も引き取れません」。社員は「無縁と(い)って、行く行く一人暮らしだった故人の遺品を整理、処分する人がいない、という問題も起きている。その役割を遺品整理専門業者が請け負っている。「キーパーズ」(本社

遺骨引き取り拒否

「すべて処分してほしい」。50歳の息子は作業に立ち会わずそう言った。スタッフは「形見として送りましょうか」と連絡したが、断られた。受け取れない事情があるのかも知れない。

「縁それぞれ」への感想をお寄せ下さい。手紙(〒5300・8555) 読売新聞大阪本社生活情報部「縁それぞれ」係、またはファクス(06・63665・7521)でお願いします。



「縁それぞれ」への感想をお寄せ下さい。手紙(〒5300・8555) 読売新聞大阪本社生活情報部「縁それぞれ」係、またはファクス(06・63665・7521)でお願いします。

社長の吉田太一さん(43)は「増え続ける一人暮らしの中には、社会とのつながりを失い、親子関係をも断ち切られた世帯がある。都会の中に、見えない無人島が広がっているようだ」と話す。東京、大阪、福岡などでサービスを提供している同社への依頼は年間約2000件。その半数が自宅に誰にもみとられず亡くなった人の遺族からという。

「縁それぞれ」への感想をお寄せ下さい。手紙(〒5300・8555) 読売新聞大阪本社生活情報部「縁それぞれ」係、またはファクス(06・63665・7521)でお願いします。